

演奏修学旅行の実践報告

英語科教諭 伊藤 雄二

音楽科教諭 安富 洋

1. はじめに (伊藤)

筆者の勤務校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校(藝高)は、今年創立60周年を迎えた。1954年の創立以来、大学教員との連携のもと、早期音楽専門教育を実施している。個々の教育活動について言えば、その質の高さは言うに及ばず、藝高独自のものも少なくない。例えば、3年生の「公開実技試験」、全校生徒による「定期演奏会」、2年生の「演奏修学旅行」、年4回の「アカンサス・コンサート」等々、枚挙に暇がない。

このような演奏活動のなかでも、とりわけ学級と生徒が中心となり、1年という長い期間を当てて準備するのが「演奏修学旅行」である。この旅行は、高校1年生の後期10月より準備を始め、翌2年生の9月下旬に、原則3泊4日で実施される。その主な目的は、他県の協力校や団体の地元で合同演奏会を開催し、音楽を通して地元の方々と交流を深めることにある。生徒は、まさに手作りの演奏会を企画するわけだが、開演までの道のりは決して平坦ではない。しかし、その分、終演後に味わう達成感はひとしおであり、これを通して、生徒は演奏会開催の難しさや協力の大切さを身をもって経験する。これは、生徒にとって音楽家への大きな一歩と言っても過言ではない。

藝高ではこの行事を始めて、今年で11年目を迎える。その間、日本各地で合同演奏会を実施し、地元の方々と交流を深めてきた。これは、我々藝高のスタッフにとっても大きな喜びであり、生徒以上の達成感につながったと自負している。そこで、本稿では、上述の演奏修学旅行の存在と意義を広く音楽高校や関係者の方々にお知らせすると同時に、ご意見をいただきたく、その詳細を紹介することにした。

具体的には、まず初めに、過去10年間の演奏修学旅行の概要を述べる。次に、本年(平成26年)度演奏修学旅行の概要と事前指導例を紹介する。さらに、合同演奏会当日の様子をお伝えし、最終的には、演奏修学旅行の教育的意義を生徒の感想文を通して考察する。

2. これまでの演奏修学旅行 (安富)

(1) 演奏修学旅行の目的

演奏修学旅行は、2004年から開始された。

どの学年も、演奏会の約10ヶ月ほど前から「総合的な学習の時間(総合学習)」と「ホームルーム活動(ロングホームルーム)」の時間を利用し、演奏曲目を考えたり、係を決めたりしながら進めている。ある程度の曲目が決定してくると、今度は、練習を開始する。

しかし、演奏以外に名所観光などのグループ活動があるので、その部分も含め、総合学習の最初の方は、教室で協議や相談を行い、その後に練習というような予定をたてて徐々に仕上げている。演奏の練習は、グループごとに行うが、専攻楽器の先生などにも相談しつつ、レッスンをし

ていただきながら進めていく。

この演奏会にはいくつかの目的がある。

まず最初は、なんといっても、本番で演奏することにより、技術の向上を目指し、経験を増やすことにある。ただし、管楽器や弦楽器は室内合奏やオーケストラといった大きな編成が可能なので、ほぼ全員が演奏できるが、ピアノ専攻生はなかなかそのようにはいかない。2台ピアノや室内楽にピアノが入ったものを選ぶが、どの学年もピアノ専攻生は12名前後いるので、全員が演奏することは不可能である。

そこで、彼らには、演奏会をつくっていく人達の仕事を体験してもらうことにしている。具体的には、演奏会において不可欠な、受付、照明、セッティングなどを行い、また、会場の係や司会まで、その内容、手順を生徒自身が考え、実際にリハーサル時から本番まで働くというものである。ほとんどの学年で、演奏会が行われるまでは、「なぜ私がこの係なのか」、「演奏できる人はいいが係の仕事は暇だ」という声が聞かれる。しかし、演奏会が終了すると、必ず、「演奏会は様々な人達の支えがあって成り立つのですね」という感想に変わる。

この気持ちを持つことはとても大切で、この経験は、その後の彼等の演奏に大きく影響を与えるものだと考える。そして、実際には裏方の仕事をせず演奏をした生徒達も、仲間がそのような仕事をやっているのを見て、同じような感想を持つようである。これが演奏修学旅行の二つ目の目的であり、最大の目的でもある。

そして三つ目は、同世代の同じ目標を持って勉強している人達との交流により学ぶことである。多くの場合、おおよそ同年齢の人達との交流演奏会になるが、お互いが刺激し合い、双方に良い結果をもたらしているように感じられる。

最後に、学外への発信という目的がある。藝高は、名の通っている学校と思われているが、案外遠方の方々には知られていない。

演奏修学旅行を一つの自校アピールの場として、南は沖縄県から北は北海道まで、藝高生達が、自分と学校の誇りを持って音楽を発信してくれていると確信している。

(2) 過去10年間の演奏修学旅行

行き先	会場	日時	交流校等	プログラム
沖縄	沖縄県立芸術大学 奏楽堂	2004年 10月1日	沖縄県立 芸術大学 音楽学部	宮城道雄：「春の海」(藝高) 三世杵屋正治郎・竹柴瓢助：「元禄花見踊」(藝高) ラフマニノフ：「2台ピアノのための組曲〈第2番〉 作品17より」(藝高) ヒンデミット：「5つの管楽器のための小室内音楽 作品24-2」(藝高) 芥川也寸志：「弦楽のための三楽章」(藝高) 琉球古典音楽斉唱 「瀧落菅攪」・「かぎやで風節」(県芸) 若衆踊り：「若衆こてい節」(県芸) 女踊り：「かせかけ」(県芸) 雑踊り：「浜千鳥」(県芸) 琉球古典音楽独唱：「仲風節」(県芸) 組踊：「久志の若按司道行口説」(県芸) 雑踊り：「黒島口説」(県芸)

演奏修学旅行の実践報告

行き先	会場	日時	交流校等	プログラム
北海道	かでの 2・7	2005年 10月2日	H B C ジュニア オーケス トラ	宮城道雄・望月太喜雄：「北海民謡調」(藝高) 氏川彩：「アルトサクソフォーンと2台のピアノの ための・・・」(新曲・藝高) ラヴェル：「木管五重奏 組曲〈クープランの墓〉 より」(藝高) プーランク：「2台ピアノのためのソナタ」(藝高) ヴィヴァルディ：「ヴァイオリン協奏曲〈四季〉 より」(藝高) グリーンカ：「ルスランとリュドミラ〈序曲〉」(合同) チャイコフスキー：「バレエ組曲〈くるみ割人形〉 Op.71aより」(合同)
秋田	アトリオ ン音楽 ホール	2006年 10月1日	国際ソロ プチミス ト秋田 (主催) 藝高単独 演奏会	モーツァルト：「フィガロの結婚〈序曲〉」 チャイコフスキー：「弦楽セレナード 第1楽章」 ラフマニノフ：「2台ピアノのための組曲〈第2番〉 作品17より」 網守将平：「Seztet?~for Flute, Clarinet, Alto Saxophone, Trumpet, Two Pianos and Tape」 (新曲) 宮城道雄：「さらし風手事」 モーツァルト：「ピアノ協奏曲 第9番〈ジュノム〉 KV.271」
愛媛	新居浜市 市民文化 センター	2007年 9月30日	愛媛県在 住卒業生 によるコ ンサート 実行委員 会(主催) 藝高単独 演奏会	三世杵屋正治郎：「鏡獅子」 モーツァルト：「アンダンテとメヌエット」 チャイコフスキー：「2台ピアノによるバレエ組曲 〈くるみ割人形〉 Op.71a」 板東祐大：「ピアノ三重奏曲」(新曲) バッハ：「ブランデンブルク協奏曲 第5番」 モーツァルト：「ディヴェル ティメント 第11番 KV.251」
沖縄	沖縄県立 芸術大学 奏楽堂	2008年 9月29日	沖縄県立 芸術大学 音楽学部	宮城道雄：「春の海」(藝高) 青柿将大：「2本のファゴットとピアノのための 三重奏曲」(新曲・藝高) 松尾怜奈：「アルト・サクソス、テナー・サクソ とピアノのための三重奏曲」(新曲・藝高) ラフマニノフ：「2台ピアノのための組曲〈第2番〉 作品17より」(藝高) バッハ：「管弦楽組曲 第2番 BWV.1067」(藝高) 琉球古典音楽斉唱：「コハデサ節」(県芸) 琉球舞踊：「かぎやで風」(県芸) 福富秀夫：「彩舞〈ピアノ4台16手、打楽器と琉球 楽器のための〉」(県芸)

行き先	会場	日時	交流校等	プログラム
長崎	活水学院 東山手本館大チャ ペル	2009年 9月30日	活水高等 学校	<p>バッハ：「最愛なるイエスよ我らここに」(活水) デュフレ：「フーガ」(活水) 北爪道夫・谷川俊太郎：「さる」(活水) 大田桜子・宗左近：「虹の輪の花」(活水) 新実徳美・谷川俊太郎：「生きる2007」(活水) 藤永検校・宮城道雄：「編曲 八千代獅子」(藝高) ベッリーニ：「〈清教徒〉より“あなたの優しい声が”」 (活水卒) モーツァルト：「〈皇帝ティートの慈悲〉よりロンド “どうか、今この一時だけでも”」(活水卒) ロッシーニ：「〈音楽の夜会〉より“ヴェネツィアの 競艇”」(活水卒) ラフマニノフ：「2台ピアノのための組曲〈第1番〉 作品5より」(藝高) 久保哲朗：「オーボエ四重奏曲」(新曲・藝高) ビゼー：「〈アルルの女〉第2組曲より」(藝高) ハイドン：「交響曲第101〈時計〉より」(藝高) 小土井彩華・林田安澄：「この世界を笑顔に」(合同)</p>
京都	京都堀川 音楽高等 学校 ホール	2010年 11月3日	京都堀川 音楽高等 学校	<p>ベートーヴェン：「交響曲 第7番 Op.92 より」 (合同) ブラームス：「交響曲 第4番 Op.98 より」(合同) 宮城道雄：「都踊」(藝高) スメタナ：「ロンド」(堀川) プーランク：「エレジー」「カプリッチョ」(藝高) カステレード：「笛吹きの日より」(堀川) ベートーヴェン：「Adagio & Finale」(合同) 信長貴富：「混声合唱とピアノのための〈新しい歌〉 より」(堀川) 伊藤大祥：「2大ピアノとオーケストラのための協 奏曲」(新曲・藝高・堀川エキストラあり) 佐藤眞：「混声合唱とオーケストラのためのカン タータ 〈土の歌〉より “大地讃頌”」(合同)</p>
福岡	福岡女学 院ギール 記念講堂	2011年 9月30日	福岡女学 院高等学 校音楽科	<p>宮城道雄：「春の海」(藝高) バッハ：「プレリュードとフーガ BWV.533」(福岡) ドビュッシー：「小組曲より 〈小舟にて〉 〈行列〉」 (福岡) トーメ：「ファンタジー」(福岡) 水上颯葵：「2本フルートとピアノのための 〈幻想 曲〉」(新曲・藝高) ブラームス：「ハイドンの主題による変奏曲 Op.56b」(福岡) リムスキー=コルサコフ：「交響組曲 〈シェラザード〉 Op.35より」(藝高) ブラームス：「ピアノ四重奏曲 第1番 Op.25 より」(藝高) ジュルジュ：「ミサ曲 第9番より」(福岡) 中島夏樹：「小オーケストラのための 〈エクローグ とダンス〉」(新曲・藝高) チャイコフスキー：「弦楽セレナード 第1・4楽章」 (藝高) 佐藤眞：「混声合唱とオーケストラのためのカン タータ 〈土の歌〉より “大地讃頌”」(合同)</p>

演奏修学旅行の実践報告

行き先	会場	日時	交流校等	プログラム
広島	エリザベト音楽大学セシリアホール	2012年 9月30日	エリザベト音楽大学	藤永検校・宮城道雄：「編曲 八千代獅子」(藝高) スメタナ：「2台8手のための一楽章のソナタ」(藝高) 松崎颯太：「秋の訪れ」(新曲・藝高) 中村翔：「2つの舞曲」(新曲・藝高) ホルスト：「セントポール組曲 Op.29-2 より」(藝高) 佐藤眞：「混声合唱とオーケストラのためのカンタータ〈土の歌〉より“農夫と土” “死の灰” “大地讃頌”」(合同)
北海道	札幌大谷大学大谷記念ホール	2013年 9月30日	札幌大谷高等学校音楽科 北星学園女子高等学校音楽科	四代目杵屋六三郎：「勧進帳 滝流し」(藝高) 宮城道雄：「春の海」(藝高) ボザ：「山の夏の日より」(北星) 高橋宏樹：「祀り～サクソ4重奏のための～」(大谷) 寺岡鴻希：「ロンド」(新曲・藝高) サン＝サーンス：「ピアノ協奏曲第5番より」(大谷) スメタナ：「2台8手のための一楽章のソナタ」(藝高) ハイドン：「オーボエ協奏曲 Hob.VII.gc.1」(北星) スクリャービン：「ピアノソナタ第4番」(大谷) スーク：「弦楽セレナード」(藝高) 佐藤眞：「混声合唱とオーケストラのためのカンタータ〈土の歌〉より“大地讃頌”」(合同)

3. 平成26年度演奏修学旅行の概要と事前指導（伊藤）

(1) 行程表

本年度演奏修学旅行の概要を「しおり」と「保護者会資料」より抜粋して以下に記す。

期 日：平成26年9月27日（土）～9月30日（火） 3泊4日

目的地：岡山・京都方面

引 率：鈴木芳明（副校長）、高橋裕、安富洋、千谷恵里花、伊藤雄二（担任）

集合場所：9月27日（土）JR 東京駅 丸ノ内地下南口 団体集合場所（改札口前）

集合時間：7：45AM（のぞみ17号 8：30発）

協力校：くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学、岡山県立岡山城東高等学校

緊急連絡先：省略

解 散：9月30日（火）JR 東京駅 18：30頃（ひかり526号 18：10着）

旅 程：

1日目 【9月27日（土）】

東京駅（8：30）==== 岡山駅（11：55）・・・駅前ヨシノ（昼食）・・・後楽園
・・・（14：30）岡山県立城東高等学校（17：30）・・・美観地区見学・・・ホテル（19：10）

2日目 【9月28日（日）】

ホテル（8：30）・・・倉敷作陽大学にてコンサート・交流会（9：00～17：30）
・・・ホテル（18：30）

3日目 【9月29日（月）】

ホテル（7：30）==== 岡山駅（9：29）==== 京都駅（10：55）・・・渡月橋

・・・ トロッコ嵯峨野駅 === トロッコ亀岡駅 ・・・ 大徳寺 (座禅体験)

・・・ ホテル (17:30)

4日目 【9月30日 (火)】

ホテル (8:30) ・・・ 班別タクシー研修・・・ ホテル (14:30) ・・・ 京都駅 (15:33)

=== 東京駅 (18:10)

※9月26日 (金) 事前演奏会

※10月1日 (水)・2日 (木) は2年生振替休業日

(2) 交流校の紹介

第2章では、過去10年間の演奏修学旅行の目的や概要を紹介した。北は北海道から南は沖縄、さらに四国・九州までまさに日本各地の方々と音楽を通して交流を深めてきた。合同演奏会で得られたその年その年の「絆」を思うと感慨無量である。と同時に、藝高職員の長く地道な奮闘・努力を感じてやまない。そして、その原動力となっているのは、間違いなく交流校からの惜しめない協力体勢である。この協力なくして、藝高の演奏修学旅行は成立しなかった、と言っても過言ではない。

本年度は、くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学 (作陽大) と岡山県立岡山城東高等学校 (城東高校) の二校から大きな協力をいただいた。三校合同演奏会の前日練習は城東高校で行われた。礼儀正しい城東高校の生徒達がリーダーを中心にてきぱきと行動する様子は、本校生徒にとって大きな刺激となった。また、三校合同の演奏会は作陽大の「藤花楽堂」をお借りして開催された。このホールは、洋楽ばかりでなく邦楽にも調和する気品あるホールで、生徒は大満足であった。

(3) 事前指導

事前指導の難しさはさまざまであるが、大きく二つに分類できる。一つ目は、約1年先の演奏会当日の様子がなかなか見えてこないことに起因する困難さである。1年後のことをイメージしようとしても、初めて演奏会の企画をする生徒達にはなかなかピンとこない。このような経験不足からくる問題には、過去の資料を活用して不安を払拭したい。教員のアドバイスはもちろんのこと、先輩からの経験談には耳を傾ける生徒も多い。

二つ目は、音楽を専攻する生徒だからこそ経験する困難さである。激戦を勝ち抜いて入学した藝高生は音楽に積極的に関わろうとする強い思いを持っている。しかし、その関わり方が積極的すぎると摩擦が起これ、その思いが強すぎると軋轢が生じる。特に、演奏会の演奏者決定までの道のりは平坦ではない。本年度の2年生も例外にもれず、クラス内の話合いが進まず、トラブルもあったが、その分、演奏会で得られた喜びもひとしおであった。以下にそれまでの、指導過程を記したい。

2013年

10月 ロングホームルームで、演奏修学旅行の準備開始を宣言する。

演奏修学旅行の目的を確認する (演奏会の成功を強調する)。

過去 (58・59期生) の例を取り上げ、合同演奏会のプログラム・しおり・協力校を紹介する。作陽大学、城東高校についても紹介する。

音楽科の先生方に心構えや演奏会の計画上の注意点・留意点を話していただく。

音楽科の先生方と相談し、演奏会の上演時間、藝高の持ち時間、演奏曲目の種類、演奏曲

目の時間と順番、演奏者のグループ数等を仮決定する。

- 11月 具体的な演奏者グループと演奏曲目決定のために話し合う。
話し合いが進まない場合は、音楽科教員にもグループの話し合いに参加していただき、アイデア等を紹介していただく。
曲目の選定にあたっては、藝高の音楽科教員及び、大学教員にも助言をいただくように生徒に伝える。
- 12月 プログラム内容の最終的な結論を出す前に、必ず曲目の詳細と演奏者を藝高教員に知らせるよう指示する。
曲目と演奏者のリストを音楽科教員を通して大学教員に提示し許可をいただく。

2014年

- 1月 楽譜等を揃え、練習開始に向けて準備する。
- 2月 グループ内での準備が整ったところから練習を開始する。
- 3月 4月からのスケジュールを確認する。
※1月～3月までは行事等でロングホームルームの時間が取れないことに注意する。
- 4月 練習を本格的に開始する。
藝高教員又は大学教員に演奏を聴いていただくように指示する。
教員による下見計画を開始する。協力校二校と綿密な連絡を取り合う。
- 5月 練習継続。
旅行の全体概要（旅程）を示す。
宿泊ホテルの食事を決定する。食物アレルギーの調査と連絡。
- 6月 練習継続。
旅行中の部屋割り・バスの座席を決定する。
京都でのタクシー研修のグループを決定する。見学場所も検討する。
タクシー研修での見学場所・昼食場所・費用・時程を決定し、担任まで提出する。
- 7月 演奏会当日の司会・受付・ステージ係を決定する。
演奏者のステージ配置図を提出する。
プログラムノートの原稿を演奏グループごとに考える。
教員の下見を2泊3日で実施する。生徒にはその結果を詳細に伝える。
※夏期休業中の練習計画は校舎壁面工事のため断念した。
- 8月 プログラムノートの原稿提出（8月10日）
しおり原稿を完成する。

- 9月 201ホールを各グループ均等に割り当てて練習する。
新幹線・トロッコ電車の座席を決定する。
しおりを作成・配布し、説明する（音楽科・養護・担任）。
演奏会司会の原稿を考えさせ練習する。
藝高での事前演奏会の準備をする。
事前演奏会の実施（26日）。ステージ係には「ばみる」指導をする。
荷物（スーツケース等大きな荷物）をホテルに送付する。

※ 旅行者決定は2014年の1月頃に決定し、4月より打ち合わせを開始する。
その後2ヶ月に1度程度の打ち合わせを続け、下見計画が始まる頃から、月に1度の割合で打ち合わせを行う。2014年9月には3度打ち合わせを行う。

4. 合同演奏会の実施報告（安富）

(1) 演奏会

日時：2014年9月28日（日）

開場：13：30 開演：14：00

場所：くらしき作陽大学 藤花楽堂



(藤花楽堂入口)

プログラム：

① 混声四部合唱（作陽）

- ・ 鷗（三好達治作詞／木下牧子作曲）
- ・ くちびるに歌を（フライシュレン作詞／信長貴富訳，作曲）
くらしき作陽大学合唱団イル・マガッツィーノ
ピアノ：北道花野 指揮：羽山晃生

② 尺八独奏（藝高）

- ・ 雲井獅子（樋口対山作曲）
尺八：田島懐哉

- ③ ピアノトリオ（城東）
- ・ピアノ三重奏曲第1番 Op.49（メンデルスゾーン作曲）
ヴァイオリン：大倉理佐　チェロ：岡本蒼馬
ピアノ：渡邊光貴
- ④ フルートアンサンブル（藝高）
- ・アンダンテとロンド Op.25（ドップラー作曲）
第1フルート：大道詠亮　第2フルート：泉野有香
ピアノ：沼田昭一郎
- ⑤ 2台ピアノ（藝高）
- ・2台のピアノのためのソナタ ニ長調 K.448 <375a>（モーツァルト作曲）
第1ピアノ：尾田奈々帆　第2ピアノ：大塚菜々子
- ⑥ サクソフォンアンサンブル（作陽）
- ・クロバーリーフ・スイート（酒井格作曲）
solo：長瀬敏和　Sop：浜桐瑞季，山脇舞子
Alt：金丸裕一・佐藤仁香・小合沙朋・熊岸奈津美
Bar：北村美幸　Bass：松本穂
- ⑦ 混声四部合唱（城東）
- ・おらしょ（千原英喜作曲）
・狩俣ぬくいちゃ（松下耕作曲）
岡山城東高校合唱部　指揮：森野啓司
- ⑧ ピアノ木管五重奏（藝高）
- ・ピアノと木管楽器のための五重奏曲（カプレ作曲）
フルート：棚本彩水　オーボエ：芳野円香
クラリネット：山下花音　ファゴット：山田哲朗
ピアノ：村田茉莉花
- ⑨ 弦楽アンサンブル（藝高）
- ・セントポール組曲 Op.29-2（ホルスト作曲）
藝高2年ストリングオーケストラ　指揮：安富洋
- ⑩ 管弦楽（城東）
- ・パイレーツ オブ カリビアン（バデルト作曲）
岡山城東高校管弦学部　指揮：三宅康一
- ⑪ 混声四部合唱（合同演奏）
- ・大地讃頌（佐藤眞作曲）

藝高・城東・作陽 合同合唱、オーケストラ
指揮：渡邊康雄

(2) 事前演奏会、前日リハーサル、演奏会

① 事前演奏会

例年のことであるが、演奏修学旅行出発前日、もしくは前々日に事前演奏会を行っている。演奏内容の確認、演奏の最後の調整などが出演者にとっては一番大切なことであるが、司会、受付、セッティングなど各係の生徒は事前演奏会のゲネプロからその仕事を体験し、作業を把握するという重要なコンサートである。

セッティング係は、ピアノの位置、ピアノの蓋の状態（全開、半開、閉じる）などの確認、弦楽器や管楽器奏者の譜面台や椅子の位置などの確認をゲネプロ時に行う。そして、ビニールテープで位置を示す、いわゆる『ばみる（場見る）』と呼ばれる作業を行う。

司会者はマイク音量の調整などを行うことになる。

このように、演奏者はもちろん、それ以外の係の生徒達も含め、事前演奏会において、様々なチェックを行うことで、演奏修学旅行のコンサートをよりすばらしいものにするために勉強することになる。



（「ばみる」作業をする生徒）

② 前日リハーサル

例年は、演奏会前日に演奏会場でのリハーサルを組み、そのときにホールの音響やセッティングの確認を行ってきたが、今年度は、一緒に交流する城東高校でリハーサルを行った。城東高校の先生方、生徒達はとても好意的で、バスで到着した私達を校舎の前で出迎えてくれた。

到着後、短い時間ではあったが、歓迎のセレモニーがあり、その後、城東高校の先生が振り分けてくださった部屋で各グループの練習を行った。城東高校の生徒達は、藝高生の練習を熱心に聴いてくれた。

また、合唱のメンバーは、城東高校の合唱部員達と一緒に《大地讃頌》の練習を行ったが、練習後、合唱部員達が、藝高生に歌のプレゼントをしてくれた。このように温かい交流ができたことは演奏にも良い影響を与えたのではないかな。

各グループでの練習終了後、オーケストラと合唱の合わせによる《大地讃頌》の練習が行われた。本番の指揮者である渡邊康雄先生が指導して下さり、大変充実した練習が行われた。藝高の生徒達、



（岡山城東高校校舎前で歓迎を受ける）



（渡邊康雄先生によるリハーサル）

城東高校の生徒達、ともに次の日の演奏会を楽しみしている様子で、前日のリハーサルを終了した。

③ 演奏会

今年の演奏会は、くらしき作陽大学の藤花楽堂で行われた。

9時前にくらしき作陽大学に到着し、プログラムの折り込み作業などを手伝い、9時40分からゲネプロが開始された。各グループは練習室で、それぞれ音出しや合わせを行い、予定時間前にはホールでグループごとにゲネプロを行った。

司会者は岡山城東高校の司会生徒と打ち合わせを、また受付係の生徒も打ち合わせをして、受付の準備を行った。セッティング係の生徒は、藝高のセッティングだけでなく、すべてのプログラムのセッティングを担当した。事前演奏会でも行った「ばみり」作業や、かなり複雑なセッティングもあったが、生徒達は実によく動き、頭も働かせていた。どのプログラムも滞りなく進んでいったのは、セッティング係の活躍によるところが大きい。

出演生徒達は、自分達の演奏以外のときは、できるだけ交流校の演奏を聴いていた。

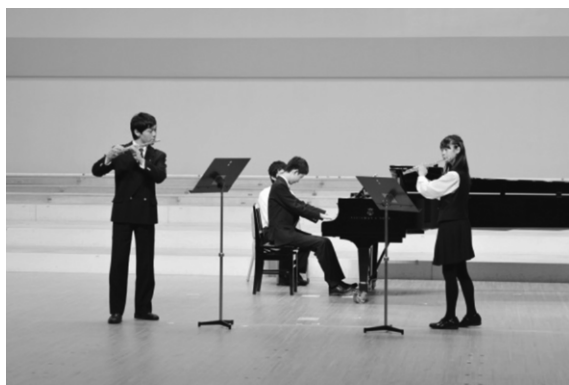
この交流演奏会は同年代の人達の演奏を聴いたり、一緒に作業したりする中から影響を受けたり、新たな発見をしたりすることが大切だと思っているが、生徒達はその目的を充分理解し、積極的に活動していたように見受けられた。



(3校合同による大地讃頌)



(尺八独奏)



(フルートアンサンブル)



(ピアノ木管五重奏)



(2台ピアノ)



(弦楽アンサンブル)



(終了後の集合写真)

5. 考察(伊藤)

ここまで、藝高の演奏修学旅行の11年間を教師の視点から述べてきたが、実際の主役は生徒である。そこで、本章では旅行後の生徒が何を、どのように変容したかを彼らの感想文を通して模索したい。

【感想文A】

「・・・入学してすぐ、先生から『演奏修学旅行は岡山へ行きます。』と聞いたとき、少し残念な気持ちになったことを、今でも覚えています。なぜなら、岡山と聞いて、思い浮かぶものがあまりなく、何をするのか?と置いていたからです。・・・そんなこんなで、私は修学旅行に対してそんなに興味はありませんでした。・・・」

生徒の演奏修学旅行への第一印象は上記の感想文に代表されよう。彼らの興味・関心は、初めはどうしても「観光」に向けられる。そのため、目的地が観光地であるか否かは大きな問題であり、この段階では演奏修学旅行の目的を意識できる生徒はほとんどいない。この状態は一年生の4月から9月末まで続く。しかし、いよいよクラスの話し合いが始まる頃、この旅行が単なる「観光」ではないことを徐々に気づき始める。そして、大きな転機は、「誰が演奏者として出演するか」を決定する際に訪れる。具体的には、演奏会の時間的制約から、本校ピアノ科専攻の生徒全員(本年度は14名)が演奏者として演奏会に参加できないことが問題となる。そして、生徒の演奏に対する思いが積極的であればあるほど問題は深刻化する。また、室内楽のピアノ奏者を決定する際

にも同じ問題が浮上する。この問題の解決策としては、生徒の話し合いの重要性を認めながらも、オーディションにより演奏者を決定する方法等の採用を提案したい。

【感想文B】

「・・・まず、この修学旅行のメインでもある演奏会では、プログラムを考えるとところから、全て自分たちで作りました。そんな中、すごく大事だと感じたのは、一緒に一つの音楽を作り上げることができる仲間がいるということの大切さです。・・・」

大小のトラブルを乗り越えて、生徒は自分一人のできることの限界に気づき、他の生徒の存在を認める時期を迎える。演奏会のグループやそのメンバーを決定してもなお、曲目さらには楽譜の入手など生徒相互の協力が必要なことは言うまでもない。この頃から、生徒は「仲間がいることの大切さ」を肌で感じ始める。まさに、演奏者としての自覚の第一歩である。

【感想文C】

「・・・本番当日、いい緊張感を持ちながら午前中が終わり、ついに本番！皆で弾ける喜びを全身で感じながら舞台へ上がりました。これまで皆で頑張ってきたこのセントポールを仕上げたと思うと、本当に楽しく演奏を終えることができました。最後の大地讃頌は城東高校さんと作陽音楽大学さんの力も借りて、自分で言うのもなんですが、圧倒的な演奏だったと思います。

修学旅行に行くまでは色々あったりして、僕自身少し心配なところもありましたが、このような最高の形で終わることができてとても良かったです。こういった学年で行く行事はもうないですが、藝高の思い出の一つとして、残りの一年半も全力でたくさんのことに挑戦していきたいです。」

教師冥利に尽きる感想だが、ほぼ全員がこのような感想を持って旅行を振り返っていることを記しておきたい。この達成感の裏には当然ながら、演奏会の成功がある。旅行前日に開催した事前演奏会のみならず、本番での成功が生徒を上記の感想に導いたと思われる。そして、旅行全体は「雨降って地固まる」結果になった分、喜びもひとしおであったと想像できる。

【感想文D】

「・・・もちろん演奏経験は藝高生のほうがあるのは事実ですが、普段はない打楽器や管楽器の音に圧倒されながら、城東生の生き生きとしたエネルギーを感じました。

私は城東生の純粹に音楽を楽しんでいる気持ち、やりたいという意志が自分よりも強いことを発見しました。自分は何かいろいろな事にとらわれながら音楽をやっていて、苦しいと思うことが多くなって、楽しさを忘れていた部分があり、しかし本当に大切なのは楽しんで弾くことだなと思いました。・・・」

【感想文E】

「・・・城東高校の人達は、音楽を専門としていない人、楽器をやり始めて間もない人も多くいました。ですが、合唱、オケの人たち皆、本当に一生懸命に練習していて、藝高生に負けない音楽への意気込みに驚きました。

これまでは、演奏家を目指す藝高の様子しか知りませんでしたが、今回城東高校と交流をし、

普通の人たちが普段どのようにすごしているのか、少しですが知ることができました。そして、他校との交流、合唱で、失いかけていた音楽を演奏する上での本来の目的について、考えさせられたことが多くあったように思います。・・・」

感想文Dでは、藝高生が城東生から貴重な刺激を受けて、忘れかけていた音楽の楽しさを思い出している。また、感想文Eでは、同様に、音楽を演奏する上での目的を考えている。これはまさに、第2章で述べた、演奏修学旅行の3つ目の目的が達成された例である。同世代の生徒から受けた刺激は生徒の心を動かしやすく、音楽をより深く見つめるきっかけとなっているようだ。

【感想文F】

「・・・裏方の仕事は主に、楽器やイス、譜面台など演奏に必要な物を演目に応じて舞台に運ぶことです。リハーサルでは舞台の上のそれらを置く場所にテープで印をつける—業界用語でバミると言います—という仕事もしました。それを目印にイスや譜面台を設置していく訳です。演目は複数曲あるのでそれぞれに応じてイスや譜面台を置いてゆくのですが、テープは曲ごとに色分けされたり、テープに番号が書き込んであったりで全ての位置を区別してバミります。何百という数のテープを作る作業はそれだけで大変でしたが、それを立ちしゃがみながらバミっていく作業は腰にきました。イスはともかく譜面台は重いものもありリハーサル後の昼食では、ハシを口に運ぶのもおっくうだった覚えがあります。この疲れで本番に臨めるのかという不安もありました。・・・この経験を通じて、普段僕たちが舞台上に立つ裏にはこのような苦労があるのだと肌で知ることができました。舞台上での演奏はたくさんの人達に支えられてできるのだということをしっかりふまえて楽器を演奏したいと思います。」

この「ばみる」作業をする機会に恵まれた生徒は、演奏する機会に恵まれなかった生徒である。終演後のこの生徒の清々しい、自信に満ちた顔つきは忘れることができない。生徒にとって、何が一番の収穫であったかどうかは推測の域を脱し得ないが、この生徒こそ最大の収穫を得た生徒の一人であると確信している。

6. おわりに（伊藤）

本稿は、藝高で11年間にわたり実施されてきた演奏修学旅行の実践報告である。過去の資料を整理し、事前指導や演奏会当日の様子を紹介し、生徒の作文を通してこの行事の教育的意義を模索した。その意義を客観的に示すことは難しいが、生徒の感動や変容ぶりからその断片だけはお伝えできたのではないか。

最後に、演奏会翌日より京都に移動し、大徳寺大仙院では座禅に挑戦した。その際の住職の言葉（達磨大師より）に生徒一同感激し、身を乗り出して聞き入っていた。彼らは心に染みこむものを感じ取ったのであろう。その言葉を紹介して本稿を締めくくりたい。



（大徳寺大仙院での座禅体験）

「氣心堅人己」（気は長く、心は丸く、腹立てず、人は大きく、己は小さく。）